仮面

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面

【Ｎコード】
Ｎ１３１２Ａ

【作者名】
クノウ

【あらすじ】
最終兵器彼女のアケミのストーリー。

「ねえ、アケミ……」「ん～なによ、ちせ。」
「アケミって、好きな人……いる？」　「はあ？」
「だから、好きな人……。」「好きな人って…Ｌｉｋｅじゃなくて
Ｌｏｖｅのほうの好きってこと？」
「ちっ、違うの。そんなんじゃなくて」「ちせ……」「あっ！ごめ
ん、別にいいんだ。」　「あんたもしかして、好きな人できたの！
？」
「（ポッ）……。」

「へ～、ちせもそうゆうお年頃か～。で、相手は誰なの？白状しな
さいよ。」
「だから違うって。あたし“好き”とかじゃなくて、なんとなくか
っこいいって思うだけだから。」
「そういうのを、“好き”っていうんじゃないのさ。」
「そ、そうかなぁ…」「で、相手は？相手のどんなところに惚れた
の？」
「それは……」
「おいっアケミ！！」「ん？」「あっ…」「なんだ、シュウジじゃ
ないの。」
「なんだじゃねえよ、先生が呼んでたぞ。」
「あっ！いっけない、呼ばれてたの忘れてた。ちせ、先に行ってて。
」「……。」
「ちせ？」「……。」「ちせ！！」「うわっ！！」
「たく、どうしたのよちせ。ボーっとしちゃって。」「な、なな、
なんでもないよ！」
「ふ～ん……まあいいや。じゃあ私行くから。」「うん……」
「シュウジ、ちせに変なことするなよ？」「誰がするか！！」「ア

ッ…アケミ……」
「はは、冗談よ。じゃあね～」

「失礼しました～」ようやく話が終わった
「さ、部活に行きましょか。」一人で部室まで歩く
「そういえば、ちせの好きな奴のこと聞いてなかったな。あとで聞き出してやろ！」
どうやって聞き出してやろうかと考えていると、ちょうどお目当ての人物がいた
そっと近づいて……
「わっ！！」「キャッ！！」「なにしてんの？ちせ。」「なんだ、アケミか……」
「なによその言い方は。まるで、誰か他の人が良かったって感じだけど……あっ！」
「な、なに……」「さては、今好きな人のこと考えてたな？」
「え！？ちちちっ違うよ！！絶対に違う！！」顔が真っ赤だ
「あやしい……」「うう～」「あ・や・し・い！！」「むう～～」
そんなやり取りが五分ほどつづいて
「はぁ、練習があるからもう行くわ。また練習見ていくの？」「う、うん……」
「じゃあ、あとでね。」「うん、頑張ってねアケミ。」

タッタッタッ……
「そこ、ペース落ちてるぞ！！」「はい！」
はぁ…　どうもちせの『好きな人』のことで練習に身が入らない
そう、なんとなくだがわかっているのだ。ちせの好きな人……
元々男性と話すのが得意でないちせが、いつにも増して緊張し全く話せなくなってしまう男。
今日だってそうだった
２人で話していたときに“アイツ”が来ると、ちせは固まっていた。

さっきだってボーっとしてはいたが、その視線は確実に“アイツ”を捕らえていた。
そして今も……
自分の数メートル前を走る男
「シュウジ……」
幼馴染の腐れ縁。そして、自分の想い人……

シュウジは知らないだろうが、シュウジは後輩の面倒見もよく、足も速く、頭もまぁ良い方だ。
本人の事を良く知らない人から言わせれば、ポーカーフェイスなところがいい……とか、　校内での人気は高い方なのだ。

「はぁ……。」
わかっている。シュウジと自分が男女の関係になるには近すぎた。
それに色々とバカをやり過ぎた。
たとえこの気持ちをアイツに伝えることが出来たとしても、気持ちが届くことは無い……　アイツにとって私は、男友達みたいな感覚なのだ
「なんであんなやつ好きになっちゃったんだろう…。好きにならなければこんな気持ちにならなくて済んだのに……。」

「よーし、今日はこれくらいで上がっていいぞ～。体は冷やすなよ。」
部活が終わった。今日はもう走る気分ではない、着替えて帰ることにしよう。
「ちせ、まだ待ってるかな？」
いつもだったらグラウンドの土手のところで待っててくれるはずだ。
「ちせ～、お待たせ。」でも返事が無い
ちせはグラウンドを見つめている。
グラウンドには、未だに走っている人影が……

「……シュウジ。」
皆が走り終わってからも、しばらくは走り続けている、いつもの光景だ。
だが、そのいつもの光景がとても綺麗で見飽きない。
男が何かに一生懸命になる姿は、正直かっこいい。
（ああ、自分はこの姿に惚れたんだな……）と、なんとなく考えてしまう

「あ、アケミ。お疲れさま。」「ん？ああ、ちせこそ退屈じゃなかった？」
「そんなことなかったよ。練習を見てるの楽しいし……」
そういってまたグラウンドを見る
ちょっと意地悪をしたくなった。
「そりゃあ、大好きな人が走ってるのを見るのは楽しいよね。」
「うん……」「シュウジの走ってる時の姿ってかっこいいもんね。」
「うん……」
「そんなに好きなら告白しちゃえば？」
「うん……って、何言わせるのよアケミ～！！」
ようやく気付いたらしい
「まあ抑えて抑えて。あんたがシュウジのことが好きなのは、なんとなく分かってたから。」
「う～。」
「……好き……なんでしょ？」「……（コクッ）」
「どうする？」「どうするって……」「告白するかってことよ。」
「え～！！」
「大丈夫よ、ちせなら可愛いし、守ってやりたくなるようなタイプだから。きっとシュウジもＯＫしちゃうべさ。」「……そうかな？」
「大丈夫だって。ＯＫしなかったら言うまで殴りつけてやるからさ。」
「でも……」

「あーー、ぐずぐずしないの。それにしてもなんであんなやつを好きになったかなあ？」　「……」ちせに言ったことだが、自分の胸に突き刺さる。
ほんとに、なんで好きになってしまったんだろう？
「ちせ。応援するからさ、頑張ってみなよ。」「……う、うん……」
「もっとはっきり！！」「え！？うん、が、頑張る。」「よし。」

私の恋は実らない。なら、せめてこの親友の恋を実らせてあげよう。
人に言わせれば、これは偽善かもしれない。
自分の気持ちを偽ってまですることじゃない。
だけど、わたしは今まで“仮面”をかぶってきたのだ。
この想いを誰にも知られることのないように……
そしてこれからもかぶり続けていくのだ
仮面を必要としないときが来るまで。
そんな日が来ない事を祈りつつ……

昔の事を思い出していた。
いつのことだったろう？ちせの恋を応援しようと決めたのは。もう二，三年前になるかな？

でも、ごめんね、ちせ。
わたし、もうすぐ死んじゃう……
だから、いいよね？もう仮面をはがしても。
この想いを伝えても……

「シュウジ、大好きだよ！！」

§
E
N
D
§

（後書き）

＜ｆｏｎｔ　ｓｉｚｅ＝２＞この話は、『変わりゆく心』のアケミサイドです。リクエストがあったんで書きました。
場面としては、アケミが死ぬ直前を想定してます、自分としては９５点ぐらいの出来です。
今度は、ＰＳゲームの内容で書いてみたいです、いろんなストーリーがあるみたいなので。＜／ｆｏｎｔ＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1312a/

仮面

2010年10月12日16時56分発行